



ポルトガル | フランシスコ・ラランジョ
ブラジル | イヴォネッチ・カヴァルカンチ
中国 | 烏 鳴 鳴 烏 鳴 雷
韓国 | 崔 民建 姜 善英 吳 美帥
田 秀敏 川田 剛 朴 然 嫩
許 智虎 李 自連 柳 帝 夏
井ノ上理恵 李 賢珍 申 京 愛
洪 東植 李 正喜 辛 美 花
姜 バレム 李 星陸 浦川 亜津子
姜 昌浩 南 孝真 呂 閏 暎
金 福 洙 盧 淳 天

日本 | 井川 惺亮 園田 洋子 松尾 雄志
伊藤 昭博 高島 芳幸 松尾 美希
伊藤 敬生 高橋 眞司 松尾 龍伸
ウエダ清人 竹下 美美 三木 祥子
上田 貞子 田中 睦治 宮田 徹也
宇久小中学校 津野 元子 宮部 真知子
薄井 崇友 坪田 政雄 宮本 圭子
大塩 博美 徳永 玲子 村里 政則
尾形 勝義 永田 典子 森 貴也
小栗栖まり子 中田 寛昭 森永 昌樹
片平 仁 中村安次郎 守屋 聡
金子 衛 野坂 知布 諸岡 沙織
川田 泰子 波多野 慎二 山口 吟子
岸川 優子 馬場 史子 山口 亮
木嶋 正吾 浜谷 信彦 山村 知宏
木本 和幸 早見 義 山村 みき
国松 実 平井 真人 山本 伸樹
倉橋 えり奈 廣岩 裕香 吉岡 宣孝
小畑 郁男 深江 嵯成枝 吉川 信雄
貞包 智美 藤上 慶 吉田 晴夫
さとうしのぶ 藤松 綾子 吉田 形 勳
佐藤千代子 降田 達季 渡部 幹雄
三和幼稚園 古本 元治
重野 裕美 前田 真希
柴 清文 増田 和剛
関 淳一 松尾 桂子



支援者 | 浅浦 恒敏 関 淳一 藤上 慶
伊藤 敬生 高橋 眞司 古本 元治
池田 陽一 高本美恵子 増田 和剛
ウエダ清人 田窪 麻周 松尾 桂子
上田 貞子 田中 睦治 松尾 雄志
後 啓子 津野 元子 三木 祥子
浦川 亜津子 坪田 政雄 森永 昌樹
大塩 博美 トアースベース 山口 吟子
音辻 尊徳 永田 典子 山口 亮
川田 泰子 中田 寛昭 山下 良夫
木嶋 正吾 中村安次郎 山村 知宏
金 福洙 西岡美貴子 山村 みき
さとうしのぶ 波多野 慎二 吉田 形 勳
佐藤千代子 馬場 史子 吉田 晴夫
佐藤 優子 廣岩 裕香
三和幼稚園 深江 嵯成枝

ボランティア | 平山 莉奈子 長池 佑華
高橋 裕一 中島 瑞穂
中村 華子 矢野 大輝
秋島 萌菜
(敬称略・五十音順)

8+9 2018 -被爆73年 長崎から-

長崎を最後の被爆地とする「誓いの火」灯火台
(爆心地公園内)
折り鶴パフォーマンス

8/9|木| 10:00~16:00

長崎県美術館県民ギャラリーC室
7/31|火|~8/5|日|
10:00~20:00

オープニングセレモニー&
姜バレム 個展トーク
7/31|火| 14:00~15:30

宮田徹也 講演
「長崎から発信する現代アート」
8/5|日| 14:00~15:30

長崎県美術館運河ギャラリー
7/31|火|~8/5|日|
10:00~20:00

開催「地球の反対側と繋がろう! ぞうりでアート」
イヴォネッチ・カヴァルカンチと宇久島の子どもたち
(ブラジル作家)

長崎ブリックホールギャラリー
7/17|火|~28|土|
10:00~20:00(最終日15:00まで)
RING ART展(有志)

主催 | RING ART
後援 | 長崎大学教育学部 長崎県 長崎市 長崎県教育委員会
長崎市教育委員会 ポルトガル大使館 駐福岡大韓民国総領事館
在名古屋ブラジル総領事館 一般社団法人日本ポルトガル協会
長崎日本ポルトガル協会 NBC長崎放送 NCC長崎文化放送
KTNテレビ長崎 NHK長崎放送局 NIB長崎国際テレビ
長崎ケーブルメディア 長崎新聞社 朝日新聞社 西日本新聞社
毎日新聞社 読売新聞西部本社 エフエム長崎
助成 | 平成30年度長崎市芸術文化活動助成事業

「8+9 2018 -被爆73年 長崎から-」記録集
編集・発行 RING ART 発行日 2018年9月
E-mail : info@ringart.jp
http://www.ringart.jp





RING ARTの活動と平和

宮田 徹也(嵯峨美術大学客員教授)

私がリングアートに呼ばれたのは、2014年だったと記憶する。関東に居住する私にとって、旺盛なリングアートの活動全てを網羅することは不可能だが、これまで夏は何度も呼ばれ、美術館と長崎大学で講演を行った。爆心地公園、ブリックホール、歴史文化博物館、ポケットギャラリー、高校のグラウンドとリングアートは多様な場所で展開してきた。

2018年の展覧会で、私はブリックホールの展示を日程が合わなくて立ち会うことができなかつたのが残念ではあった。講演の当日、まず訪れた美術館運河ギャラリーで展開されている作品群に驚きながらも感動した。それはリングアートの活動の主でもある国際交流が育んだだけのことではない。

確かにイヴォネッチ・カヴァルカンチの指導による、ブラジル・サンパウロ市の小学生と宇久島の小中学生が草履によって生み出したインスタレーションに迫力があつた。それは子供らしい作品であるとか、子供には見事な造形だという話しではない。いま、ここで自分ができること、そしてそれより少し力が入つたことができているのだ。

それが子供達だけなら、それだけのことであろう。長崎、福島、東京といった各都市のプロのアーティストの作品も、このような状態になっている。この地で作品を生み出したアーティストもいるのであろうが、多くの各人は予め作品を制作し、会場に持ち込んだはずである。全てが子供の作品に見え、会場全体が鼓動を發していた。

それは、県民ギャラリーCも同様である。会場に入って左右の壁面には国内のアーティストの作品が整然と並び、奥には韓国アーティスト達の作品と、招待作家のカン・バレムのインスタレーションが毅然として展示されているはずなのに、会場は同時多発的に花火が上がっているように、個々の光が燦然と輝いているのだ。

1990年以降、近代は消滅しアメリカが地球を支配する「新世界秩序」の時代へ突入した。近代の病であつた自由=支配、平等=差別、博愛=戦争どころか「神になりそびれた人間」と国境が消滅する。アメリカは世界の警察となつた。戦争とは元を正せば人間同士の摩擦である。それが許されなくなった。また、金を持っていなければ人間として扱われない。

「新世界秩序」は、政治や経済といった人間を取り巻く環境と同様、当然美術界にも影響を及ぼす。古来、美術

は神の写し身の姿であつた。それが近代になって、漸くちっぽけな人間の姿を表すようになった。それは次第に保守と革新とへ分断されていったが、それでも共に「モダンアート」の在り方に関して正面から立ち向かつていた。

2010年頃から、保守にも革新にも当て嵌まらない「アート」が誕生した。それらの作品群はオークションで美術館の予算以上の価格で取引され、アニュアル、ビエンナーレ、トリエンナーレといった国際展に登場し、果てはMOMA、ポンピドゥー及び分館、テートモダン、森といった巨大美術館で展覧される。

神奈川県立近代美術館鎌倉館は、県の財政難を理由とした所謂「神奈川臨調」により消滅した。これを先例として、これから各都道府県の公立美術館は閉館に追い込まれるであろう。国は、一部の大型美術館以外、全国津々浦々に美術館など必要ないと考えているのであろう。モダンアートを展示する場所が、なくなるのである。

そして保守革新問わずモダンアートが抹殺され、上記の「アート」のみが生き残るのであろう。この「アート」を何と名付ければいいのか。私の中には「ビジネスアート」「ユートピア以後のアート」と様々に候補がある。ここでは少し乱暴だが、文脈に沿って「新世界秩序アート」と名付けよう。

「新世界秩序アート」は新世界秩序を操る者達同様、人間ではない茫洋とした孤高の存在である。私は講演の前々日、マエバシモメントの前で、井川惺亮から自身と師である山口薫の関係性と、山口の言葉が今でも自己の心に生きている話を聞いた。つまりモダンアートで最も重要なのは人間であることと、人間の関係性なのである。

我々はモダンアートを守るだけでなく、モダンアートを再検証し、更に実践しなければならない。その一端が、リングアートなのである。モダンアートは、これまで子供の作品を退けてきた。これから、そうはいかなくなる。皆本二三江の児童画の研究も見過ごすことは出来ない。我々に果たすべき課題は山積なのだ。



多数決と美術作品の価値づけ

早見 堯 (美術評論家)

昨年11月、わたしも所属している美術評論家連盟総会で峯村敏明氏は会長を辞任する理由を説明した。美術評論家が集まった会ですら、多数決でものごとが簡単に決定されてしまうことへの怒りと嘆きだった。民主主義は考えの差異を認めることが基本だ。考え方は違うのが当然だから。議論は違う考えを理解するためのものであって多数決のためのセレモニーではない。最初から多数決ありきでは考えの差異を理解しあうことはできない。日本の現在の政治は国会での多数決を民意だととり違えている。

政治の世界では、保守合同によって自民党が単独政権を築いたいわゆる1955年体制から、バブルが崩壊した後の1993年まで、国会は自民党の多数決原理に支配されていた。1993年の選挙で自民党が過半数割れて野党になり連立政権ができたあたりから「決められない政治」になった。それは当然のことで、「連立」の名の通り主義主張の違う人々が寄り集まれば多数決決着は通用しない。それが民主主義だと思う。でも、多くの日本人は「船頭多くして船山に登る」的な刷り込みが行われているので「決められない」ことをもどかしく感じた。そんな状況で登場したのが安倍内閣。「一歩前へ」という男子トイレの注意書きよろしく、前に進めるためには「決める政治」だと唱えた。

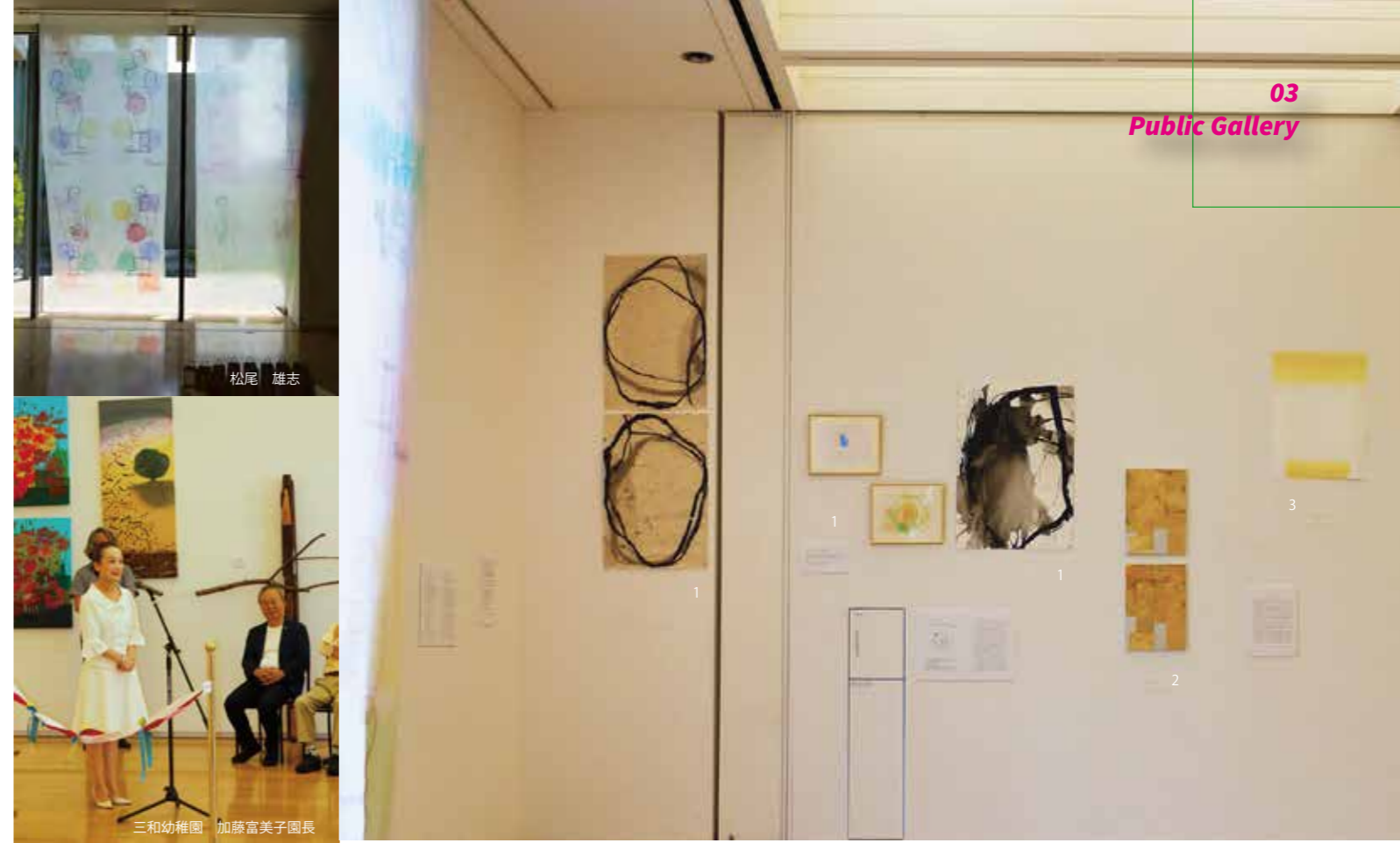
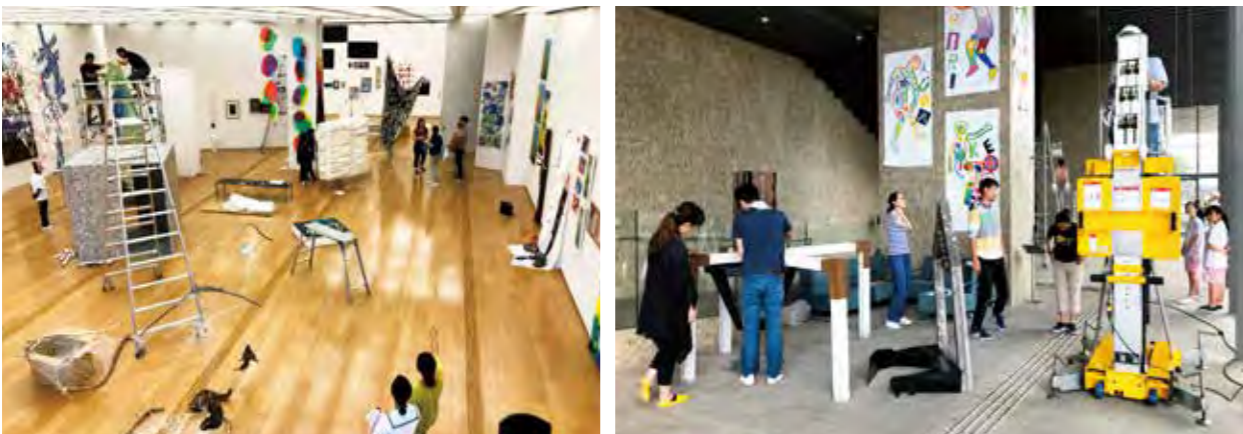
総裁選目当ての酒宴に打ち興じつつ、西日本大水害やオウム死刑囚処刑などを深刻な歴史的出来事として理解できないで、7月11日には自民党が提出した参院定数を「6増」する公職選挙法改正案を参院本会議で多数決可決した。一方、カジノを含む統合型リゾート実施法案は6日参院本会議で審議入り。与党は19日に参院内閣委員会で可決し、会期末の22日までに多数決で成立させる予定だと伝えられている。

参院定数「6増」案は自民党の党利党略、カジノ法案は「観光」名目の「金儲け」目的だ。数の力で自分の利益だけを「前に進める」ことと、人間的な倫理を忘れた「金儲け」至上主義。今の安倍内閣と自民党の姿だ。

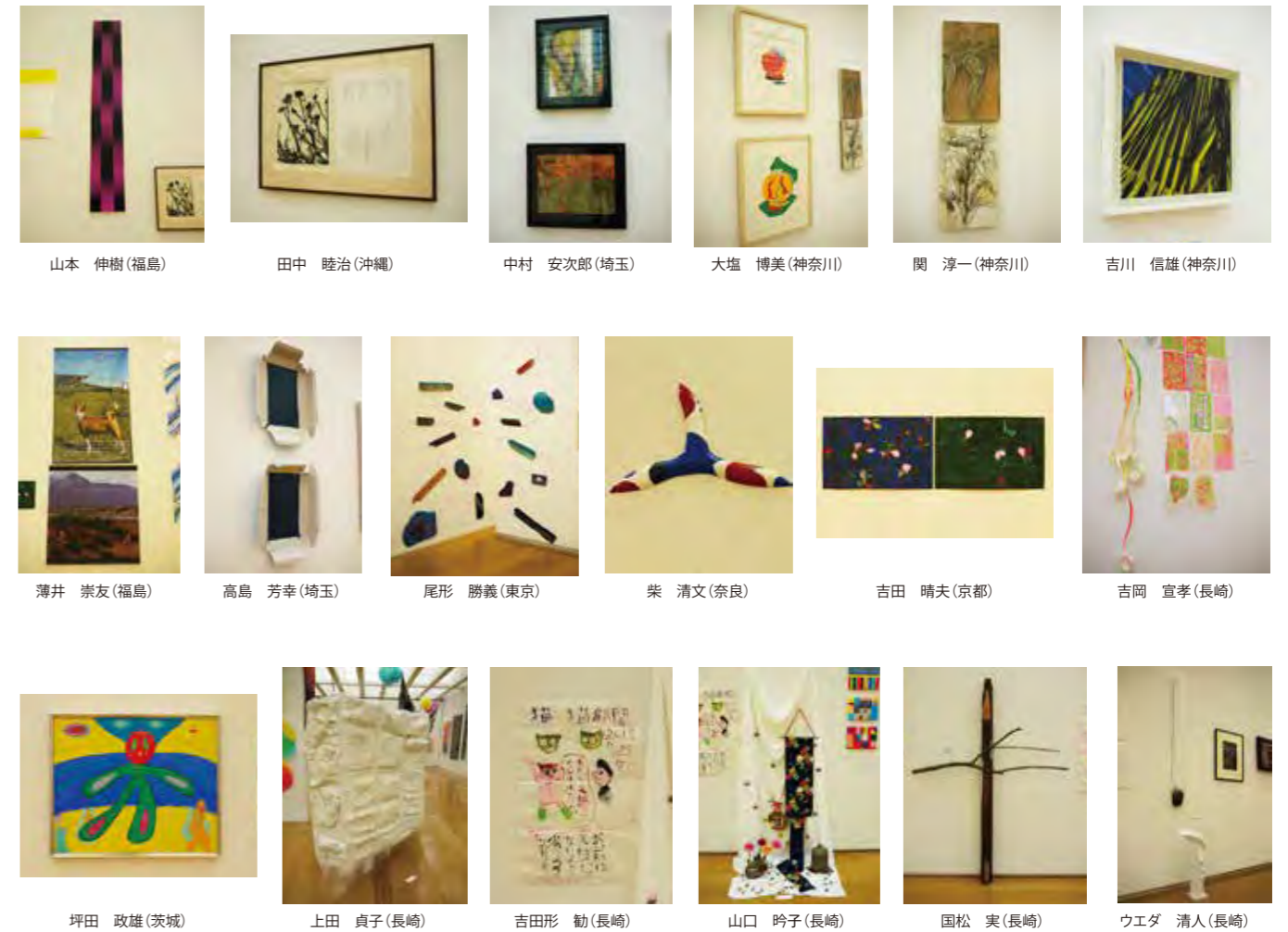
美術関係で特記される「金儲け」成長戦略は、アート市場の活性化を先導する悪評高い「リーディング・ミュージアム」案だ。美術館や博物館の所蔵品を市場に売りだして、コレクターの購買意欲を高めアート市場の活性化を促すことが目的だとか。美術館や博物館の所蔵品は、どんな作品であろうと「商品」以上の価値があることに気づいていない。

失敗すべくして失敗した「クール・ジャパン」戦略と同じ発想だ。「芸術」を手慰みの「手芸」と同じ癒しや効能だとしかみなすことができない。芸術作品を経験してそこで価値判断するという文化がいまいち曖昧なままだ。文化庁が今年4月17日付けで公表した「アート市場の活性化に向けて」を一瞥すると、アートを経済的効能としてしか考えていないことがよくわかる。宗教はご利益や効能のレベルがいまでも重要であることと認識が似ている。

「国家の株式会社化」が進んでいると指摘したのは思想家の内田樹。お金さえ手に入れば潤えばほかはテキストでいいからという人々の気分につけこんで、いつかは破綻することに気づいていながら今だけよければという「マイカ」主義の虚妄の経済成長芝居が演じられている。美術はそうした虚妄のなかにとりこまれたくない。美術批評は衰退し必要ないと思われるのかのようだ。はたしてそうだろうか。「金儲け」至上主義の文化成長戦略に対抗するために必要とされているのは、芸術作品や美術作品を享受する力、そして、それらを価値づける批評にほかならない。多数決決着は通用しない。



1. フランシスコ・ランジョ (ホルトガル) 2. 木嶋正吾 (東京) 3. 古本元治 (福岡)



山本 伸樹 (福島) 田中 睦治 (沖縄) 中村 安次郎 (埼玉) 大塩 博美 (神奈川) 関 淳一 (神奈川) 吉川 信雄 (神奈川)
薄井 崇友 (福島) 高島 芳幸 (埼玉) 尾形 勝義 (東京) 柴 清文 (奈良) 吉田 晴夫 (京都) 吉岡 宣孝 (長崎)

坪田 政雄 (茨城) 上田 貞子 (長崎) 吉田形 勸 (長崎) 山口 吟子 (長崎) 国松 実 (長崎) ウエダ 清人 (長崎)



津野 元子 (千葉)



永田 典子(東京)



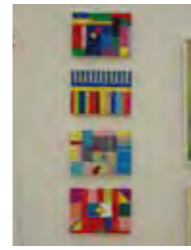
さとう しぶ(千葉)



伊藤 昭博(大分)



平井 真人(沖縄)



深江 嵯成枝(長崎)



南 孝真(昌原)



倉橋 えり奈(長崎)



呂 間暎(昌原)



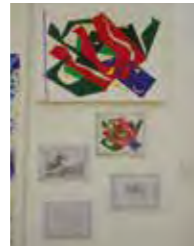
佐藤 千代子(長崎)



金子 衛(長崎)



川田 泰子(鹿児島)



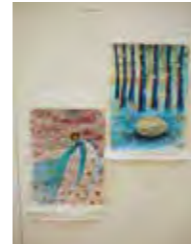
岸川 優子(長崎)



木本 和幸(長崎)



馬場 史子(長崎)



李 賢珍(昌原)



姜 昌浩(昌原)



姜 善英(昌原)



田 秀敏(昌原)



辛 美花(昌原)



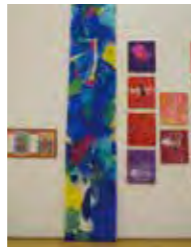
金 福珠(清州)



藤上 慶(山口)



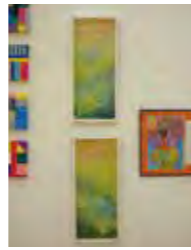
吳 美帥(昌原)



重野 裕美(長崎)



園田 洋子(長崎)



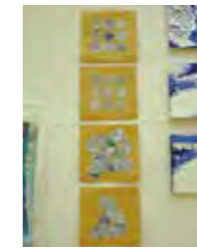
徳永 玲子(長崎)



崔 民建(清州)



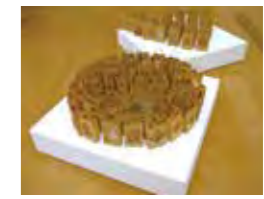
浦川 亜津子(清州)



烏 鳴鳴(内蒙古)



烏 鳴蕾(内蒙古)



中田 寛昭(福岡)



村里 政則(長崎)



諸岡 沙織(福岡)



浜谷 信彦(長崎)



降田 達季(長崎)



増田 和剛(高知)



李 正喜(昌原)



李 星陸(昌原)



廣岩 裕香(長崎)



前田 真希(長崎)



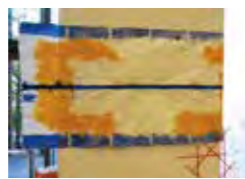
森永 昌樹(佐賀)



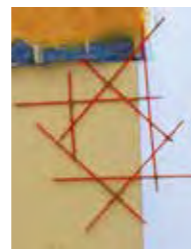
三和幼稚園(長崎)



松尾 桂子(長崎)



山村 知宏(福岡)



山村 みき(福岡)



山口 亮(長崎)



守屋 聡(長崎)



波多野 慎二(長崎)



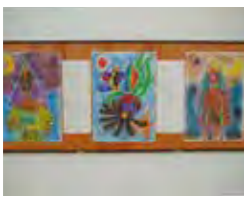
李 自連(清州)



松尾 美希(東京)



野坂 知布(長崎)



貞包 智美(長崎)



洪 東植(釜山)



朴 然淑(大邱)



川田 剛(大邱)



申 京愛(大邱)



許 智虎(昌原)



盧 淳天(昌原)



宮部 真知子(長崎)



井ノ上 理恵(昌原)



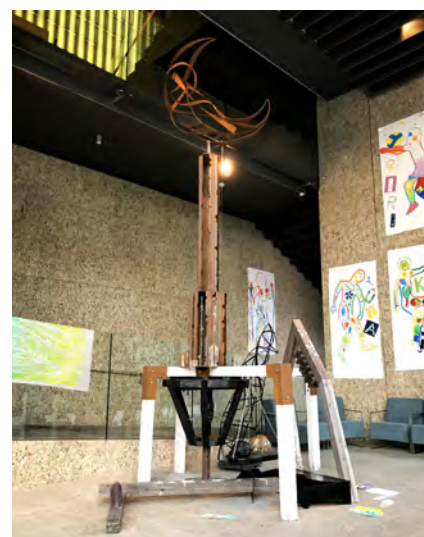
小栗栢 まり子(福岡)



〔作品左〕 尾形 勝義(東京)

〔中央〕 井川 惺亮(長崎)

〔手前〕 三木 祥子(東京)



森 貴也(大分)



片平 仁(福島)



伊藤 敬生(福岡)



イヴォネッチ・カヴァルカンチ(ブラジル)

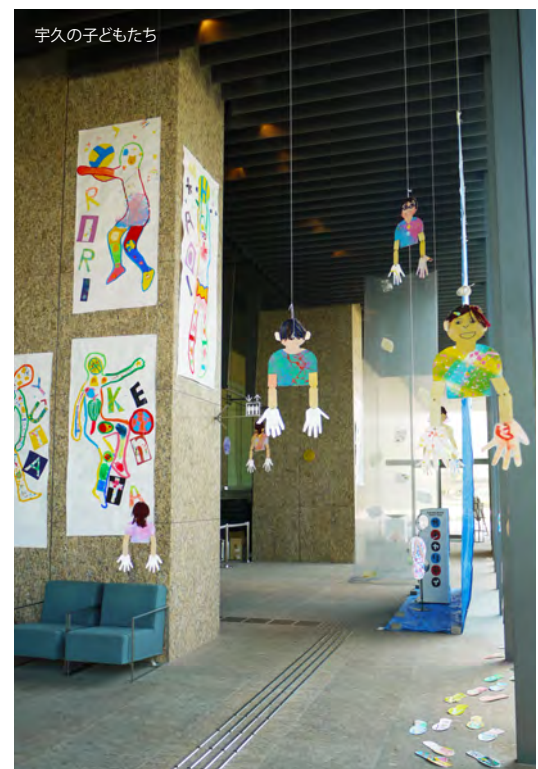


柳 帝夏(大邱)

(作品写真の掲載について)
作品写真の掲載につきまして、作者の皆様のご意向に沿えなかった点もありました。中ではガラス・アクリルの額縁作品は光の反射のため、やや斜めから撮影しました。次回のパンフレット作成では時間的余裕をもって対応いたしますので、どうかご了承をお願いします。



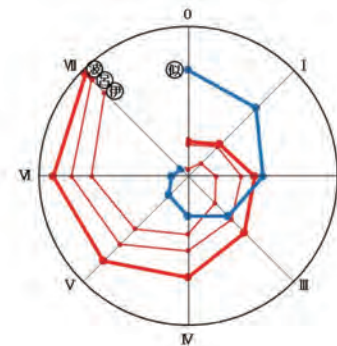
ザンパウロと宇久の子どもたち



宇久の子どもたち

ヒロシマ・ナガサキの原爆体験と被爆者運動 —石田 忠「総括表」のレーダーチャート図を通して—

高橋 眞司(哲学者)



石田 忠「総括表」のレーダーチャート図

〔凡例〕
調査対象の被爆者数は合わせて6,744人。円の中心は0%;円周は100%
ローマ数字(時計文字) 0—VIIIは被害の層

伊: 生きる意欲の喪失体験のある者
呂: 国の責任を問うている者
波: 類型A・B型—生きる目的に反原爆のすべて(3項目)を含めているもの(A); いずれか一つを含めている者(B)
似: 類型E・F型—今の生きる意欲が己れ中心の小宇宙の者(E); 生きるはりあい、支えがとくにない者(F)

(図案)高橋 眞司 (作図)竹下 哲史

1985年は、被爆40周年にあたる。この年、被爆者団体は大がかりな被爆者調査をおこなった。調査に深く関わった社会調査家・石田 忠は「原人会」(「原爆と人間」研究会)の支援をうけて、じつに1550枚もの統計表をつくり、その結論ともいべき「最後の一片」を「総括表」と名づけた。くわしいことは他にゆずるが、その「総括表」を「レーダーチャート」(円形グラフ)に直したのが、この図である。

ヒロシマ・ナガサキで原爆に出合った人びとは、原水禁運動の高まりのなかで「日本被団協」(日本原水爆被害者団体協議会)という全国組織をつくり、「核と人類は共存できない」として原爆と核兵器をなくすことを求め、そこなわれた健康と生活を回復するために国家補償にもとづく援護法の制定をもとめて、運動をつづけてきた。

このレーダーチャート図が語っているのは、次のようなことである。原爆被害が重くて深い層—被害があまりにも大きく、生きる意欲を奪われるほどの体験をした層(IV—VII)になればなるほど、「反原爆の3項目」にかたむく。すなわち、「被爆の証人として語りつぐ」、「援護法制定の日まで生きぬく」、そして「核兵器を地球上からなくすために生きる」と答えたものの比率が、累進的に高くなっている(伊・呂・波)。

それにたいして、原爆被害が相対的にすくない層(0—III)においては、「生きる支え」として「家族に囲まれて生きる」、「仕事や趣味に生きる」、あるいは「生きる支えはとくにない」などが逆進的に高まっている(似)。石田 忠「総括表」とそのレーダーチャート図によれば、原爆体験の深重なことと「生きる支え」のあいだには厳密な相関関係がある。そこには一糸の乱れもない規則性・法則性が見出されたのであった。

こうして、石田 忠は「総括表」をふくむ1551枚の統計表の分析をつうじて、被爆者であることを共通点としてもつ以外には、多種多様なひとびとの集団である日本被団協が、核兵器の廃絶と被爆者援護法の即時制定をもとめて、集団討議をかさね、国の内と外で血のにじむような運動を展開したあけく、アンモナイトにも、水晶にも、真珠にも、ダイヤモンドにも比すべき、ゆるぎのない法則性と美しい秩序をもった集団であることを見事に立証したのである。

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは、「驚嘆すること」(タウマゼイン, $\theta\alpha\upsilon\mu\acute{\alpha}\zeta\epsilon\iota\nu$)を通じて哲学は始まるとした。私たちは自然と景観の美しさに打たれ、自然法則の簡素な美しさに驚く。また、人びとの努力と集団的な営みの中にも、自然のそれに劣ることのない法則性と秩序のあることに驚嘆せずにはいられない。

ところで、戦後70年余を経た今日、戦争と原爆を体験した人びとは年ごとに少なくなっている。それは歴史の必然的な流れであるが、これを石田忠の「総括表」とレーダーチャート図によって考えるなら、それは類型A・B(赤線)が足早に減少して、類型E・F(青線)が多数を占めるという新しい歴史的事態が生じていることである。

この歴史の新たな局面にたいして、広島でも長崎でも、行政と教育機関、民間団体と個人によって多くの特色ある活動がくり広げられてきた。そうした中で、井川惺亮と仲間たちの「RING ART」とそれに呼応する内外の芸術家たちによる「8+9〜被爆73年、長崎から〜」の開催は、事柄の性質上もっとも前衛的であり、子どもも障がい者をもつつみこんで包摂的であり、その持続するところざしには歴史的な意義がある、とわたしは高く評価している。



8月9日長崎原爆の日、灯台に折り鶴を飾る高橋氏

芸術と平和

渡部 幹雄 (和歌山大学教授)

広辞苑によれば芸術は「一定の材料・技術・身体などを駆使して、鑑賞的価値を創出する人間の活動およびその所産。」とされ、一方で平和は「やすらかにやわらかこと。おだやかで変わりのないこと。」とされている。

芸術は寛容な社会の中で育まれる。平和な環境はより良い芸術が創造されるために欠かせない重要な要件である。精神的な束縛から解放されて真の芸術は生まれるのである。

平和を確立するためには民主的な国家が前提となる。総ての少数意見が尊重され、個人の尊厳が保たれた自由で平等な社会である。理性が支配する社会でもある。あらゆる分野における美が追求される社会。その美の表現としての芸術が尊重される社会でもある。平和な環境の中で芸術が育まれるためには真の民主主義社会の実現が必要なのである。

民主主義を維持発展する装置の一つとして図書館の存在が欠かせない。図書館の活動と民主主義は密接な関係にある。多様な意見が尊重され、その多様な考えの中から真理が追及されるという点で両者は共通している。相反する考えであってもそれぞれが尊重されて、偏狭な思考に支配されない社会を維持する安全装置でもある。日本図書館協会から2014年に刊行された竹内 愼 (たけうち さとる) 著『図書館をめざすもの』に紹介されている「アメリカ社会に役立つ図書館の12か条」の第1章で、『図書館は民主主義を維持します』と謳っている。また、第2章では『図書館は社会の壁を打ち破ります』、第3章では『図書館は社会的不公平を改めるための地ならしをします』、第4章では『図書館は一人ひとりを大切にします』、第5章では『図書館は創造性を育てます』と謳っている。民主主義を育む装置としての図書館の役割には極めて大きなものがある。しかしながらこうした理念を図書館自らが不断的努力によって実現していこうとしなければ、社会が民主主義とは逆の方向に進んでいくのではないかという危惧を抱かざるを得ない。

芸術においても同様である。非寛容な社会は人々の自由闊達な活動を阻み、豊かな創造性が閉ざされることになる。真の芸術振興には平和や民主主義が重要な要件である。それらを屋台骨で支えることができるような図書館も必要不可欠である。広辞苑の芸術の定義に戻れば、芸術は、「...鑑賞的価値を創出する人間の活動およびその所産」とある。鑑賞的価値の判断は人類が獲得した智慧に拠ると考えられる。その人類の獲得した智慧の蔵が図書館でもある。これらの智慧を駆使して民主主義が形成され、そこから芸術も平和も生まれるのではないだろうか。

被爆...それから

竹下 芙美
(長崎の被爆遺構を保存する会)

爆心地より約7キロ離れた時津村(当時)に疎開。

8月9日、農家の納屋の窓から見た閃光。3歳10ヶ月のこと。

5日目、時津～浦上～西坂町の自宅に戻る。帰宅後、20日余り続いた下痢。

17歳、大量の鼻血。20歳、虫垂炎の手術後、傷口がなかなか塞がらず、完治するのに半年かかる。25歳頃から、今日まで検査しても病名が分からない病を次々と発症。甲状腺ガンにも。毎日通院と薬は手放せない。

入市被爆であっても、このように体を蝕む放射能。この無限なる不安と悔しさを次の世代に渡せない。核実験に抗議し、原発に反対してきたが、未だに核兵器の削減は進まない。

原発事故は予想どおり起きた。テレビニュースを見た時、核の被害の重大さを、少なくとも国民に知らしめていなかったことを残念で腹立たしく思った。

あの事故から7年。多くの国民は忘れかけている。

しかし、福島に行くと、山の隅のあちこちに黒いビニール袋に入った除染土が放置されている。本当に放射能漏れの心配はないだろうか。

長崎も近くに玄海原発を抱えている。反対の声を押し切り、再稼働をした。人間と核は共存できないものを、どうしたらゼロに出来るのか。日々考える。

もうすぐ原爆投下から、73年目のあつい夏を迎える。



長崎ブリックホール2F 回廊ギャラリー



井川 惺亮(長崎)



波多野 慎二(長崎)



守屋 聡(長崎)



前田 真希(長崎)



中田 寛昭(福岡)



廣岩 裕香(長崎)



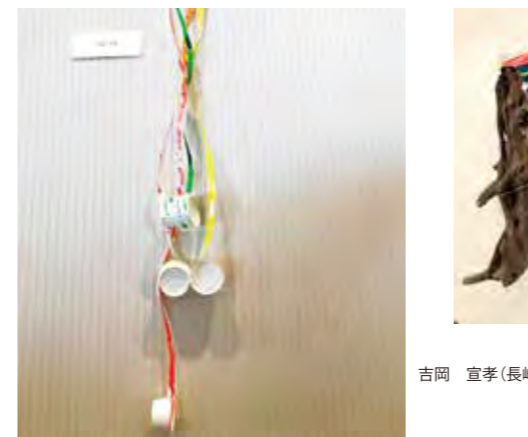
佐藤 千代子(長崎)



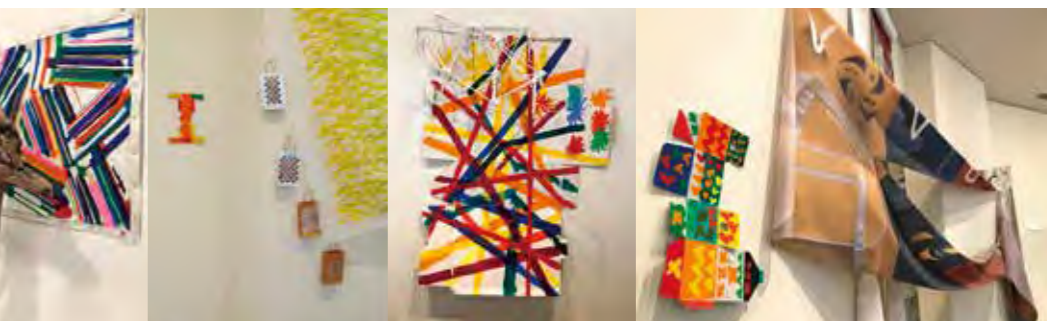
野坂 知布(長崎)



森永 昌樹(佐賀)



吉岡 宣孝(長崎)



2018年7月17日(火)～28日(土) 長崎ブリックホール2F回廊ギャラリーにて、RING ARTメンバー有志による「8+9」のプレ展を開催した。

刮目者としてのアーティスト

松尾 龍伸 (デザインアドバイザー)

「デザインはアートではない」ということは、デザイナーにとっては常識です。けれど広くは浸透していないとも言えます。

デザインの本質は、問題解決すること。

学校で美術教員が双方を扱うようになっていくことが、混乱を招いていることの一原因でしょう。デザイナーが負っているのは、クライアントの欲する目的を叶えるために、思考の整理と、形状・色彩・テキスト等配置をすることにあります。

自己表現では決してありません。

クライアントの問題意識は往々にして散らかっていますので、課題の整理をし、その戦略を補強することに多くの時間をかけます。そういう意味で、対人能力の高さがデザイナーとしての第一の資質。それに続く資質として、表現へと流れ込ませていくセンスや技術や知識があります。デザイナーのドローイングは、解決策を思考し、アタリを付けている過程なのです。

では、アーティストとデザイナー、どちらの方が社会を牽引し形作っていく力は強いでしょうか。お叱りを覚悟で申しますと、デザイナーだと思っています。デザイナーは狡猾なのです。前述のように、自己と表現を切り離して、表現を道具として使い、なんらかの意味で社会に介入し牽引していくことこそがデザイナーの技術なのです。

資本主義社会では、マーケット動向がデザインの在り方に大きく作用します。現在の大衆民主主義の下にある資本主義社会では、床山談義レベルの思考が跋扈し、猪突します。

デザイナーがダークサイドに陥り、これに同調するとき、時代は危険な方向へと向かいます。

最初の定義に戻ります。

「デザインはアートではない」とデザイナーが嘯きつつ、自己の奥底に眠る良心にまで蓋をした表現を目にしたとき、アーティストの皆さんに言語的ピンタを張っていただくようお願いしたいと思っています。

なぜなら、そのデザイナーの行為はマンハッタン計画に身を売った科学者と同等のものであり、なおかつアーティストの皆さんはそのことを見抜く目を持たれているからです。

アーティストのみなさんが、こうして平和への願いのもとに一堂に会され、世の動きの刮目者たらんとされていることに敬意を表します。

2018年8月9日、私は今こう思っている。

小畑 郁男 (作曲家)

私は、被爆2世である。母が被爆者である。

父方の祖父とその家族の多くは原爆で亡くなった。墓碑には、1945年8月9日、あるいは何日後までの没年が刻まれた家族の名前が列挙されている。

母方の祖父はフィリピンの沖で、兵隊として戦うこともなく、乗船していた輸送船とともに海の底に沈んだ。7歳だった叔父はトンボとりに行き原爆にあった。数日後に亡くなっている。

原爆の投下が戦争を終わらせたというが、現実には、戦争が終わらないうちに急いで実験が行われたのだと思う。原爆の威力を知るために、空爆の被害がなかったいくつかの都市が候補地として選ばれ、その中の広島と長崎に原爆は落とされた。

「長崎を最後の被爆地に」というが、長崎はすでに最後の被爆地ではない。核の実験は広島・長崎の後、何度も行われ、第5福竜丸がそうであったように、その実験場の近辺には被爆者がいる。

中国共産党は1964年から96年までの32年間に46回の核実験を行った。「中国がかつて実施した最大規模の核実験は4メガトンに達したが、それは旧ソ連の核実験を上回る10倍の威力だった。実験により大量に落下した「核の砂」と放射汚染は周辺住民計19万人の命を一瞬にして奪った」といわれている。中国はウイグル人が住む地域で核実験を行った。「旧ソ連でも 最低でも核実験を実施する地域を封鎖して、人の出入りを禁じた。しかし、中国の核実験は現地住民に秘密で実行した。被害者はウイグル人だけではなく、現地の漢民族も犠牲にされた。人の命の尊さを無視して実験台のモルモットのように使っている」ともいわれている。(※)

平和の対極にあるのは正義。様々な正義が戦いを生み、平和を壊してきた。平和運動が、正義を振りかざし、

嬉々として、悪者を作り出す運動にならないことを祈る。

また一方で、平和の同義語は談合である。あったことをなかったことにすることによって、未来の平和は壊れていく。

真の核抑止力は被爆者の証言である。原爆が落とされればどのようなことになるのかを世界の人々には知って欲しい。そのひとたちが政治家を選ぶ。政治家は支持者の意向に逆らうことはない。

しかし、選挙で選ばれていない独裁者には、どのように働きかけたらいいのだろうか。

(※) <http://www.epochtimes.jp/jp/2009/03/html/d15555.html>

1945年8月

宮本 圭子

(長崎を最後の被爆地とする誓いの火維持会)

私は満州の玄関口、大連市にいた。関東州立大連芙蓉女学校の一年生、正月休みもなく特別授業を受けて入学した憧れの女学校であったが、夏休みが始まって間もない日、急に登校の連絡があり、いつものように町内の数十人で隊列を組み、学校を目指して歩いていた時、突如石が飛んできた。

アッと声を上げてざわめいたとき上級生の鋭い声「騒がないで、前をむいてまっすぐ歩く！」

最上級の4年生は軍の動員で不在、3年生の4人が前後を囲んでいた。

緊張の中で聞いた敗戦の報告。校庭で円陣を作り涙ながらに「ご真影」を焼いた。昨夜ひそひそ声の両親の様子から、ただならぬ情勢、故郷長崎に強烈な爆弾が落とされたいとの意測が消えては浮かんでいたものの、こんなに早く街中の中国人に見透かされていたとは思ってもよめぬことであった。円陣をくんで涙ながらに「ご真影」を焼いた。その日の帰路については全く記憶がない。

その後商店街が襲われ、暴徒化した一部中国人の反乱、強奪があったが4階建ての私達アパートは難を逃れた。むしろ、その後進駐してきた下級ロシア兵から踏み込まれる方が危険であった。

どこで身につけたか父が怪しげなロシア語で対応する間、母と私達姉妹3人は裏庭の植木の陰に逃げこんだものだ。

一方、昼の出来事、アカシヤの樹の下で、まだ幼い妹たちがままごと遊びのさなか、通りかかった中年のロシア兵が、微笑みながら足を止めて眺めていたが、それに気づいた妹が、驚いて泣声をあげた。ロシア兵はまごつきながらも抱き上げて「よしよし」と背中を撫でていたが、一層泣声は大きくなるばかり。気付いた私から飛び出すのと、通訳が駆け寄ってくるのが同時だった。

通訳の話では、ロシア兵も同じ年ごろの子どもがモスクワに居るとの事で、つい手が出たようだ。笑って握手をして見送った。妹もその頃は笑顔になり手を振っていた。

戦後、学校に戻った私は、想像を絶する寒気の中、攻め込んだドイツと死屍累々の闘いを繰り広げたレニングラード戦を知った。

ヒロシマ、ナガサキと核の洗礼を受けた日本は次時代の戦争がいかなるものか凡その予想はつく。それは二度と開けてはならぬパンドラの箱である。

展示作品の前にトークが行う宮田徹也氏



作品が伝えるもの

藤松 綾子(親和アートギャラリー学芸員)

作品を観たずと後に、その時の印象や光景が思い出されることがある。

井川惺亮氏の作品に描かれた鮮やかな原色が彩る世界は抽象的で明確な形をもたない。それでいて、澄みわたる空や青々とした山の緑、降りそそぐ日差し、どこまでも広がる海といった光に満ちた自然の光景を感じさせる。

美術史を振り返ると、日用品や食料が手に入りにくい戦時中や戦後の時代にあっても、手持ちの画材や身近にあるものを代用して画家たちは作品を描いていたと、現存する資料や作品が伝えている。そうした作品の中には不穏な社会情勢を感じさせない穏やかな日常を写し取った絵も多くあり、何気ない日々の事象が尊く、かけがえのないものであると静かに語りかけてくる。

時を経て伝わる作品は、描かれた対象と共に画家の内なる想いを宿し、鑑賞者は自ずとそれらと向き合うことになる。

井川氏がリングアートと共に各地で行う作品展やワークショップは、抽象的で目には見えない平和の形をその願いと共に視覚化し続けている。
長崎から各地へ広がる光のように。

‘感動の集積’は危機を克服する

姜 バレム(昌原大学校教授)

人々は“力”を持つために繰り返し競争し、争う。国家間、宗教間、地域間、企業間、個人間、さらには家族間でも大きな、又は些細な争いを起こす。自分と違うという‘差’を認めないことから始まるが、その結果は途方もない。分裂、葛藤、陰謀、怒りなどが生まれる。ここに力を持つとする欲望が加われば取り返しのつかない大きな犠牲を伴う事件につながるが、それが即ち戦争である。戦争は勝利者を生むがそれは束の間であり、究極的にはすべての者を敗北者に転落させてしまう。

直接的、間接的な経験を通じ私たちはよく知っている。第2次世界大戦時のとてつもない災難と犠牲者、その後残された痛みを…。長い時間が流れたが、まだ随所に残っている。子孫に残されたこの課題の回答は未だ解決されないまま論争は続いている。多くの人々はこの緊張と恐怖から抜け出すことを願い平和を渴望している。

しかし静かで美しい都市、長崎の朝のように表面的には平和であっても、再び戦争のおぞましい気配が私たちを襲うかも知れない。平和のための努力は続けなければいけない。

美術を通して平和のために努力しているRING ARTの活動は芸術活動それ以上の価値があるといえる。自分と違うという“差”に対して芸術家は“創意性”に重きを置き関心を持って肯定的に理解しようと努力する。だから国際交流が活性化されるのだ。

また、差を克服する技術的な方法として芸術を選択する。作品によって対話し、作品を通して交流の場を持ち、共に感動する。争うのではなく理解しようとするのが芸術であり、これこそが私たちが望む平和だと思う。

2018年、8+9展によって戦争と核、平和と花、そして時間についてのことなど…私は多くのことを考えさせられた。ある出品作からは昨年とは全く違う印象を受けた。昨年は華やかな花を象徴している、と思ったが、今回の展示では核爆発が花に変化する希望のメッセージに見えたのだ。感動的だった。なぜ同じ作品なのに違った印象を受け取ることができたのか?……………

私が共に過ごした20年余りの時間と、黙々と静かに平和のメッセージを広めていく井川先生の努力があったからこそ可能なのだろう。



園児らが達磨さんとらめっこ



姜バレム教授 個展トーク風景



トークする姜バレム教授



個展風景



姜教授作品の不思議さに見入る園児たち

11 Collaboration Art

宇久とサンパウロの子どもたち



長崎県美術館 運河ギャラリー

両国の子どもたちは、作品作り以外にも、互いの学校生活を動画で紹介し合い、交流を深めた。本展終了後も相互の学校で作品展を行う。

宇久中の子どもたち(右)
宇久小の子どもたち(左下)
サンパウロの子どもたち(右下)



(左)サンパウロと宇久中の子どもたちによる「ぞうり」作品



イヴォネッチ・カヴァルカンチ(ブラジル)

1999~2001にブラジルより留学生として長崎大学井川研究室にて学ぶ。現在ブラジル、サンパウロ市の公立学校で美術教師として活動。

地球の反対側と繋がろう!ぞうりでアート

ブラジルのアーティスト、イヴォネッチ・カヴァルカンチ氏が指導するブラジル・サンパウロ市の公立学校“EMEF Professora Maria Aparecida Magnanelli Fernandes”と、長崎の離島、“佐世保市立宇久中学校・小学校”が「ぞうり」をモチーフにしたアート作品を通じて交流を行いました。

イヴォネッチさんが考案したこの作品の着想は、ビーチサンダルです。ブラジル発祥のビーチサンダルの原型は日本の“ぞうり”をヒントにしたものだそうです。その機能性の良さを取り入れたビーチサンダルは、今では全世界に広がっています。

この「ぞうり」を通して、ブラジルと日本の両国が互いを理解し合い、歩みよる象徴として表現しました。

宇久の子ども達は、この交流を通して初めてブラジルの文化に触れ、相手の国の良さを感じると共に、自国の文化、離島の文化の良さも感じることができました。

廣岩 裕香

(RING ART運営委員・佐世保市立宇久中学校 教諭)

12 ORIZURU Performance



長崎大学教育学部附属特別支援学校生徒たちの平和への祈り



わらべの会(代表:平野妙子)による童謡の合唱



折り鶴パフォーマンス

8月9日長崎原爆の日 “誓いの火”灯火台

群馬の上毛新聞によれば、「前橋空襲73年ー長崎原爆の日」として子どもワークショップが記事となった。前橋の園児らが折り鶴に着色し、アートで祈る折り鶴を長崎に持ち帰った。そして8月9日長崎原爆の日に灯火台モニュメントに飾った。

猛暑の中、今夏は特別の酷暑の中で、長崎大学教育学部附属特別支援学校生徒らが11時2分に折り鶴をもって集まり平和を祈願した。附属生徒の参加も7年継続している。

通行人は例年と比べて少なく感じた。RING ARTメンバーも心配したが、一方で思いの外海外の方の参加が増えた。とりわけ欧州の方々に参加が多かったのは、ギリシャのオリンピアの火、オリンピックの精神が彼らに響き、引き寄せたのだろう。

毎年輝く折り鶴だが、近年は観光客がスマホで記念写真を撮る姿が多く見受けられる。



オマージュ 山口薫先生

「マエバシモニュメント」は、群馬県前橋市の住宅T house(藤本壮介氏設計)のオーナー、田中是宇氏の依頼で今春制作した。使われなくなった広告看板を支える鉄骨支柱に6色を施した。お披露目を兼ねたT houseの井川惺亮展「マルセイユ ナガサキ マエバシ」の会期中には、前橋と長崎をつなぐ子どものワークショップも開かれた。

群馬は東京芸大時代の恩師、山口薫先生の生誕の地である。私は先生が受けたであろう空気と光を感じながら、後戻りできない着彩作業に没頭した。制作後、群馬県立近代美術館で山口先生の絶筆「おぼろ月に輪舞する子供達」(68年作)に再会し、不思議なことに、そこで画業の初心に戻された。実は学生の頃、山口先生の訃報に接したのがこの作品の前だった。半世紀ぶりの出会いに、子どもをモチーフにした未来志向のメッセージを受け取ると同時に、この絵は私の制作に大変深い影響を与えてきたのではないかとつくづく感じた。

その後、ワークショップで折り鶴に着彩した前橋の子どもたちの姿は、「おぼろ月に輪舞する子供達」のイメージと重なって見えた。その折り鶴は8月9日、長崎爆心地の「長崎を最後の被爆地とする“誓いの火”灯台モニュメント」に飾った。(表紙絵参照)

こうしてマエバシモニュメントは、私にとって恩師へのオマージュにもなっている。中心市街地にあり、口コミなどで市民の話題になってきたそうだ。T house(画学生時代の井川作品を展示)と、マエバシモニュメント、そして前橋テルサに飾られた子どもたちのワークショップ作品。これら3カ所を巡った前橋市長はツイッターで、「町から町へ移動して作品を見る。まるでコミュニティワーク。前橋デザインシティの原型がこれだ」と伝えた。

井川 惺亮

命懸けのアート展・平和への願い

会場が大きかった。100名余りの人たちが大作を持ち込んだ。それをどうインスタレーションするかが毎回の課題となるが、今回も閉館時間に追われた。

RING ARTのメンバーは、心の中で被爆の有様を気にしながらも、しかし平和は決して悲惨さだけでなく、未来志向の明るさを目指していくことだ。RING ARTでないといけないことを。その結果として、8+9展は長崎市内を平和一色にしたと言っても過言でなく、明るい希望への橋渡しをした。

ブリックホール会場から運河ギャラリーへ、そして県民ギャラリーと展開する中で、3会場それぞれに変化を与えるよう心掛けた。平和展はややもすれば展示が停滞気味になるからだ。

いつもと違ったのは、講演者の宮田徹也先生は講演だけでなく、作品の前でコメントしたことが出品者に刺激を与えた。二つ目に、ブラジルと離島の宇久のコラボレーションも一際目立った。これまで培ってきた国際交流があったからこそ、この展示も飛躍した。

最後に忘れることができないことは、「折り鶴パフォーマンス」である。猛暑の中、今夏は特別の酷暑で、熱中症と戦いながら「折り鶴パフォーマンス」を実施した。いずれこの時の様子も、アートとどう関わっているかを宮田先生に書いていただきたいと願っている。また、今回は飛び入りのアトラクションとして「わらべの会」によるコーラスが披露された。支援の輪が少しずつ広がるのは、私たちにとって励みになった。

報道も最初は記事にして評価してくれていたが、現在は報道が被爆の風化を助長しているのでは、と思うほど取材が途絶えている。後援ともなれば最低取材が欲しい。今回も取材がなかった。こうした変わらぬ取り組みの取材こそ、風化の歯止めになると思う。

「折り鶴パフォーマンス」の若手への継承がRING ARTの一課題でもある。

RING ART 運営メンバー一同



マエバシモニュメント(七夕会)

清心幼稚園の子どもたちとのワークショップ “流し絵を楽しもう、そして平和な心を!”



高所作業車で着彩

折り鶴に着彩する清心幼稚園児たち

前橋テルサ

前橋T house(田中是宇郎)

広告看板の鉄骨支柱

〔報道記録〕



上毛新聞 2018年8月4日



長崎新聞 2018年8月3日



(右上・右下) 展覧会フライヤー